

日本語表現の多様さ、美しさを生かす

その1 「手書き」そして「縦書き」

0、日本語で綴る文章

「日本を離れて外国で暮らし、再び日本に」帰ってきて、英語は相変わらずだが日本語は少し分かるようになってたと話したら、友人がうまいことを言った。断食したあとで食物の味が分かるようなものだというのである。

外国では日本語を読む機会が少なかった。とくに読みつけていた新聞雑誌類を読まなかった。意識して読まなかったと言つてよい。最初は読みたかったが、一度読んでみて読むのがいやになったのである。もちろん例外はあるが、そういうものの日本語の文体に、まず生理的に耐えられなかった。自分でも意外だった。へたな文章だというのはない。低劣な文章だと感じたのである。それを低劣と感じなかった数ヶ月前の自分にびっくりしたのである。何も英語と比べたわけではない。その能力は私にはない。ただその文体を味わう力もなく、抽象的にしか読めなかった英語から、すみずみまで肌で感じる日本語に戻ったから、ショックはよけいに大きかったとは言えよう。

ともかく私はまず悪い日本語、みにくい日本語に気づき、それらを平気で書いている日本人、それらを平気で読んでいた私に思い至った。そういうものを書いて生活している他人にとやかく言う資格は自分にはない。だがおれ自身はちつと身を離して考えたほうがよさそうだぞと思った。

帰国以来、私は新聞は見るが週刊誌はほとんど読まない。月刊誌もごく限られた文章だけ読む。テレビも同様、見たくないし、見る必要もあまりない。こういう態度に肯定的な面ばかりあるわけではなく、そこには危険だつて墮落だつてあるということは承知しているつもりである。第一それらをすべて否定してしまつたら、私には

仕事の間がなくなる。どんな行為にだつて矛盾は避け得べくもないのだが、まあ今はそうしたいからそうしているだけのことで、同時に私はたとえば荷風や鷗外の文章の美しさに目が開きはじめた。

新しいところでは大岡昇平、森有正などの人たちの文章に感服する。そして若くは西洋へ行った荷風、入外、それに金子光晴などが日本に感じているアンビバレンツと、それゆえの日本を見る眼の正確さが分かつてきたような気がする。ジェット機で何時間といったつて、それは運搬の速度なのであつて、旅の速度ではない、交流の速度でもないと思ふ。技術の交流は知らず、人間の心の交流の速度は今も昔もそう変わつていないと思えない。旅というものの速度もそうなので、時速千何百キロで運搬されながらも、人の心はちつとも動いてはゆかぬものである。

ヨーロッパやアメリカに行かしてもらつて、ヨーロッパやアメリカのことが分からず、日本のことが分かつてくるというのは妙なようでいて、別に妙ではなく、むしろいまだにそうだとするところに、私は自分の島国性をあらためて発見して驚いたのである。ただ私の場合は欧米に比べて日本がどうだというよりも、日本を離れて、遠くから見てみたらそう見えたということが多いので、これをしも裏返し文明開化とひがむ必要はないと思つている。わずか八ヶ月の旅で（あるいは不在で）、生活が変わるというのも日本人らしくおつちよこちよいな話だが、私の中に変わりたいという要素は前からあつたので、旅はそのひとつの契機だつたと思う。ほんとうに変わるかどうかということはもちろんこれからにかかつている。

アメリカの新聞で、サブ・カルチュアということばを見た。どういう意味で使われているのかは知らない。だが私は勝手に解釈して、たとえば大学生たちのつくりつつある文化、あるいはまたいわゆるビートといわれる一群の芸術家たちのつくりつつある文化を想定してみる。そういう文化がはたして実際に存在し得ているかどうかは論義が別れようが、私の知った範囲でも、アメリカ合衆国の文化は、日本のマスコミ一辺倒のそれに比べてまだしも多様性があるように思える。

マスコミに依存しなくても、そういうサブ・カルチュアの中で経済的にも生活し得る条件がアメリカにはあるので

はないか。フォークシンガーがキャンパスめぐりをしたり、詩人がフエローシップで生活できたりすることを、そうすばらしいこととは思わないが、そこにはその人なりの生活を貫く自由が、ほんの少しだが残っているように見える。その可能な理由はたとえばメキシコとの国境の小さな町エルパソの美術館にも、一枚のポチチェリがあるというようなアメリカの豊かさにも求められよう。けれど私としては金だけが理由だとは考えたくない。私には分析できないが、アメリカ人の中にはよいにつけ悪いにつけ、一種のひたむきなものがあり、それがあの国土の広大さと釣りあっている。

変わる、変わりたいと私の言うその方角は、やはり一種のサブ・カルチュアのほうに向かっていると思う。そういうものの育つ可能性は非常に少ないし、育ちかけてもすぐマスコミ文化の中に組みこまれて本来のエネルギーを失ってしまうのが日本だが、私にとつてはまず私一個の心が問題なのだから、もう大げさな物言いはやめる。(一九六七)〔谷川俊太郎〕散文―私は生きるのを好きだった〔第五章・旅する(講談社＋α文庫)より〕

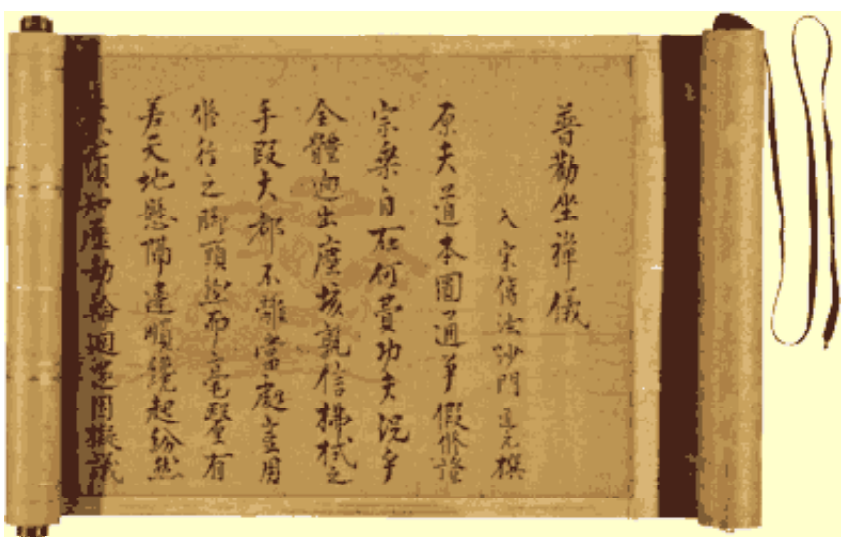
1, 手書き「文字」の文

①筆で書くこと

道元禪師『普勸坐禪儀』(永平寺「普勸坐禪儀(複製)／道元 撰／安貞元(一二二七)年／大本山永平寺提供・本学図書館B1H086/177-1。H086/177-1A。H086/177-2。H086/177-2A。(四本所蔵)天福元年道元自筆(永平寺蔵本)の複製(コタイプ印刷)、卷子本(本録)、桐箱入。また、注記に「森福寺蔵(鳥取県)の写本(万俣和尚直筆か)を複写製本したもの」・本学図書館B1 001673458 H131.1/31 に所蔵)

《課題》「普」「門」「道」「自」「有」の文字を鑑賞して、あなたが気づいたことをリポート用紙1枚にまとめてみましょう。

永平寺町 永平寺蔵 普勸坐禪儀



原ぬるに夫れ道本円通争か修証を仮らん、宗乗自在何ぞ功夫を費さん。況んや全體はるかに塵埃を出ず、孰か拂拭の手段を信ぜん、大都當處を離れず、豈に修行の脚頭を用うるものならんや。

然れども毫釐も差あれば、天地懸に隔り、違順わずかに起れば紛然として心を失す。直饒い會に誇り悟に豊かにして警地の智通を獲、道を得、心を明らめて衝天の志氣を挙げ、入頭の邊量に逍遙すと雖も、幾ど出身の活路を虧闕す。

矧んや彼の祇園の生地たる、端坐六年の蹤跡見つべし、少林の心印を傳うる、面壁九歳の声名尚聞こゆ、古聖既に然り、今人蓋ぞ辨ぜざる。所以に須らく言を尋ね語を逐うの解行を休すべし。須らく回光返照の退歩を學すべし。身心自然に脱落して本来の面目現前せん。恁麼の事を得んと欲せば急に恁麼の事を務めよ。

夫れ參禪は静室宜しく飲食節あり。諸縁を崩捨し、萬事を休息して善惡を思わず是非を管すること莫れ。心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止め作佛を圖ること莫れ。心意識の運轉を停め、尋常坐處には厚く坐物を敷き、上に蒲團を用う、或いは結跏趺坐、尋常坐處には厚く坐物を敷き、上に蒲團を用う、或いは結跏趺坐、半跏趺坐は但だ左の足を以て右の脛を圧すなり、寛く衣帶を繫けて齊整ならしむべし。

或いは半跏趺坐、謂く結跏趺坐は先ず右の足を以て左の腿の上に安じ、左の足を右の脛の上に安ず。半跏趺坐は但だ左の足を以て右の脛を圧すなり、寛く衣帶を繫けて齊整ならしむべし。

次に右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じ、兩の大拇指向かい、相さそう、乃ち正身端座して、左に側ち右に傾き、前に躬り後に仰ぐことを得ざれ、耳と肩と対し鼻と臍と対しめんことを要す。舌、上の顎に掛けて唇齒相著け、目は須らく常に開くべし、鼻息微かに通じ身相既に調べて欠気一息し、左右揺振して兀兀として坐定して箇の不思議底を思量せよ。不思議底如何が思量せん、非思量、此れ乃ち坐禪の要術なり。

所謂坐禪は習禪には非ず、唯だ是れ安樂の法門なり、菩提を究盡するの修証なり、公案現成、羅籠未だ到らず、若し此の意を得ば龍の水を得るが如く虎の山に靠るに似たり、當に知るべし正法自ら現前し、昏散先ず僕落することを、若し坐より立たば徐徐として身を動かし、安詳として起つべし。卒暴なるべからず。嘗て観る超凡越聖、坐脱立亡も此の力に一任することを。況んや復指竿針鎚を拈ずるの転機、拂拳棒喝を挙するの証契も、未だ是れ思量分別の能く解する所に非ず、豈に神通修証の能く知る所とせんや。声色の外威儀たるべし、那ぞ知見の前の軌則に非ざる者ならんや。

然れば則ち上智下愚を論ぜず、利人鈍者を簡ぶこと莫れ。專一に功夫せば正に是れ辨道なり。修証自ら染汚せず、趣向更に是れ平常なるものなり。

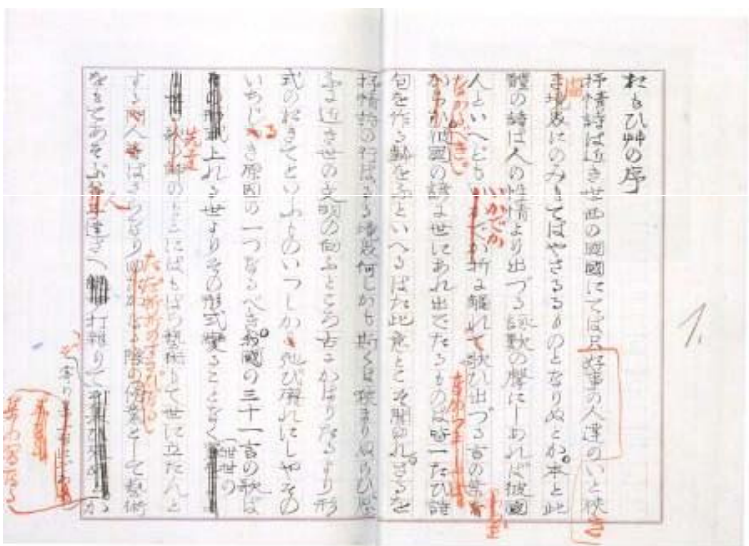
凡そ夫れ自界他方、西天東地、等しく佛印を持し、一ら宗風を壇にす、唯打坐を務めて兀地に礙えらる、萬別千差と謂うと雖も、祇管に參禪辨道すべし、何ぞ自家の坐牀を抛却して謾りに佗國の塵境に去来せん。若し一步を錯れば當面に蹉過す。

既に人身の機要を得たり、虚く光陰を度ること莫れ、佛道の要機を保任す。誰か浪りに石火を樂まん、加以、形質は艸露の如く、運命は電光に似たり、倏忽として便ち空に須臾に即ち失す。

冀くは其れ參學の高流、久しく模象に習つて眞龍を恠むこと勿れ、直指端的の道に精進し絶学無為の人を尊貴し、佛佛の菩提に合資し祖祖の三昧を嫡嗣せよ。久しく恁麼なることを為さば須く是れ恁麼なるべし、宝蔵自ら開けて受用如意ならん。

②近代作家の直筆原稿を見て

A 森鷗外『おもひ艸の序』



入外島根県津和野町出身、一八六二～一九二二の直筆原稿は、古書店書目にも稀であり、この資料も『近代作家自筆原稿』(東京堂出版刊行)の最初一二頁に収載されているものから採録した。

「世界通用ノ名トナル」鷗外、孫の命名理由記す

長女茉莉さんの夫山田珠樹氏への書簡一九二〇年十一月「命名典故」とし、「齋」は「スズメや酒器の意味を持つ「齋」の語源に触れ、スズメはかわいらしく、酒器には節制の徳に通じる意味もある、と説明。フランス語のジャク「Jaques」と同音の読み方は、「世界通用ノ名トナル」と締めくくっている。鷗外は、ドイツ留学中、自分の名前をうまうく発音してもらえなかった経験から、子どもに茉莉、於菟、孫に富と西洋風の名前を付けたが、命名理由を書いた文章が公表されるのは初めてという。(神奈川近代文学館「森鷗外展」読売新聞2009.0512)

誕生寺在居之小湊北華宗祖日
蓮生以後建佛刹於其廬趾比改
名曰誕生寺寺實山面海潮水沿泡
涯而微洑所謂鯛浦是也余在京聞
鯛浦之奇熟矣乃賃舟而登距岸
數町有一大危礁當舟濤聲勢喧

數波濤群細紙如槌延長而未者遭礁激怒欲攫去
上見波瀾事洋文字亦常見此
觀美語所傳下
不測之乎變行焉
數馬并極响極程
水聲中恐無此字
記之先擬柳記
極讚數等
碧濤相映陸離為紗礁上有鳥未
尉蒼腔不知其名濤末則一搏而
起低能回翔待濤退復立礁上
余與諸子呼奇不歇舟人笑曰不
不足道也使客觀重大奇者乃合一

人持杓立袖自在瞻操榜杓方五
寸盛鯢救白柄長五尺立者持其
端如揮杓投鯢於水者誤令未登舟
人乃顧余曰客但觀水余能眩俯
豈視頃之舟人呼曰鯢々四散意聲
而下思有綺紋生於水底簇然而
動既漸近諦觀之則赤鬚魚數

鯢四數句似
不穩
作前既擬任氏
金湯何言

排波騰上以爭鯢也時日方午炎暉
射波之光燦燦而鯢鱗赤黃出波
於其間或潛或躍或踰躍出頭
明彩燦然環舟散步間一時皆
為黃金色矣舟人曰澳父亦行十
里始能捕鯢鯢魚今以水距岸
僅數丁可斯魚群之既奇矣乎

金湯遊房其奈
仲里唐行洋漢
此欲見也其觀
今將斯文也如
馬家記也其奈
者其兄為金湯
更金色字其四

鯉不畏人更奇矣若夫濤礁相
啗風水相鬪則所云奇者安在
為奇哉捨舟步抵千誕生土寸
觀其所藏書畫數十幅日蓮
所書最多僧云高祖生時具
家得棘鳥戲二尾釣磬上明
日示得如以留七日自是土人以焉

祖政不敏坤又崇禎明神不稱其
名或有竊捕中食者焉必病瘧死
自來金至鉅子金上四等

〈課題2〉右に示した夏目漱石『木屑録』の文章を翻刻してみよう。

書式はA4縦書き文章とし、手書き原稿の場合は、黒鉛筆Fか、万年筆の黒、若しくは墨毛筆を使用すること。電子入力する場合は、ワードソフト「一太郎」を使用し、14ポイントで本文を入力したうえで、各々の漢字に傍訓を付けて、右に示した道元禪師『普勸坐禪儀』のように書き下してみよう。書き下しがむつかしい人は、原文を忠実に書写してみよう。（※朱書は、漱石の友人であった正岡子規による書き込み箇所である）

《参考資料》石川九楊著『日本書史』名古屋大学出版会、二〇〇二「縦横」の問題

石川九楊著『書で解く日本文化』

- 第1章 写経の効力
- 第2章 女手Ⅱ平仮名の発明
- 第3章 禅と墨蹟、漢語の厚み
- 第4章 解放される文字
- 第5章 寺子屋の手習い
- 第6章 遊女と書
- 第7章 日本のなかの中国趣味
- 第8章 書の巨人たち
- 第9章 近代化がもたらしたもの



2, 縦書き「文字」の文

○「縦書き」にこだわる…「天に向かって垂直に話して水平に書く西洋人と異なつて、天に対して垂直に書き水平に話す東アジア」(石川九楊氏)

○「天地」の概念

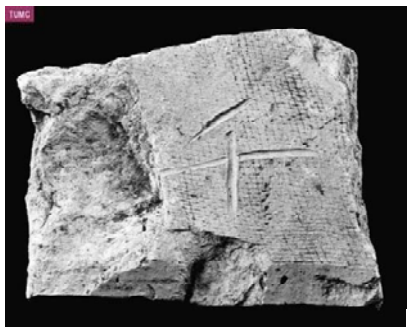
『古事記』の初句「天地ノ初發之時」(本居宣長『訂正古訓古事記』上より)は、「あめつちのはじめのとき」と訓む。師である賀茂真淵の『万葉集』卷五・八・一四の古歌「阿米都知の共に久しく言ひ継げとこの奇御魂敷かしけらしもへ山上憶良」にもとづき、「天地」の訓を「あめくに」から「あめつち」へと訂正する。

※《補遺》「天地」の語を「あめつち」で収載する古辞書は、室町時代の古辞書元龜二年本『運歩色葉集』に「天地」(二五八①) 静嘉堂文庫藏『運歩色葉集』に「天地」(二九一⑤)、印度本系統の弘治二年本『節用集』「天」

地」〔天地門二〇一③〕永祿二年『節用集』〔天地門一六六⑧〕堯空本『節用集』〔天地門一五五⑤〕及び饅頭屋本『節用集』に「天地」〔天象部一二一②〕と見えるまでその収載を見ない。では、それまでどう表記していたのが問題となってくるのだが、同じく室町時代の古辞書『温故知新書』に、「開關」〔あ(梵字)乾坤門上三③〕と訓読されているが如く訓読されていたようである。

○「十」の文字を書く。「一」が先か、「一」が後か、そしてこの合わさったのが「十」となる。古代、粘土質に「へ」で文字を書くと、どちらを先刻したかは、そのなぞり状況で確認できる。「へ」文字で書記された古代文字瓦を見るといい。ここに、「陸奥国分寺址」出土の「千」〔k¹⁵²番〕の文字などは、比較的はつきりしているので、参考に成るであろう。

「一」が先で「一」が後に刻まれている。



この「十」に「口」の枠を施すと「田」の文字に成る。日本で最古の墨書文字が三重県貝藏遺跡で出土した土器から発の時代の土器(残存高18.0センチ、胴部最大径17.8センチ、推定口縁径14.0センチ)の胴部に「田」(1.5センチ)の文字が墨書されている。



「田」文字の筆順は、現在の中国でもある。古墳文化時代、列島にはつていた時代からさほど遠くない時代であり、この時代に墨書が用いられたことは書記言語たる漢字の受容性の進捗からして重要なことといえよう。

この「十」の文字は、遺教では「十字架」の象徴でもある。石川九楊はその著『書字ノススメ』で、「一本の線を他の一本の線が横切った時、それまでのつべりとした空間の中に、求心と遠心、収束と放射の中心である交点が生まれる。交点から光が発し、空間の意味を劇的に一変するのだ。この象徴が「十」であり、この交点こそが「私」という存在に他ならない」〔新潮文庫二七二頁〕と表現する。

《余談義》『万葉集』卷一・九の「幸紀伊温泉之時額田王作歌」紀の温泉に幸せる時(齊明天皇四年)、額田王の作める歌 莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣吾瀬子之射立爲兼五可新何本」をどう訓じているかご存じですか？ 実際に、この歌を西本願寺本『万葉集』に遵つて訓読してみますと、「莫囂圓隣ノ之大相七兄爪謁氣吾瀬子之射立爲兼五可新何本」ですから、「ゆふづきの あふぎてとひし わがせこが いたたせるかね いつか あはなむ」となるのでしょうか。ですが、これを「みもろのやま みつつゆけ わがせこが いてたたしけむ いつか しがもと」と訓む説もあるのです。いわば、この時代でも未解読の歌となっています。

《余談義》『万葉集』卷一・九の「幸紀伊温泉之時額田王作歌」紀の温泉に幸せる時(齊明天皇四年)、額田王の作める歌 莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣吾瀬子之射立爲兼五可新何本」をどう訓じているかご存じですか？ 実際に、この歌を西本願寺本『万葉集』に遵つて訓読してみますと、「莫囂圓隣ノ之大相七兄爪謁氣吾瀬子之射立爲兼五可新何本」ですから、「ゆふづきの あふぎてとひし わがせこが いたたせるかね いつか あはなむ」となるのでしょうか。ですが、これを「みもろのやま みつつゆけ わがせこが いてたたしけむ いつか しがもと」と訓む説もあるのです。いわば、この時代でも未解読の歌となっています。